
p;**ダブル&ディケイド** Riders RETURN! RETURN! RETURN!

トマト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オーズ&ダブル&デイケイド Riders
RETURN! RETURN! RETURN!

【Nコード】

N2406Y

【作者名】

トマト

【あらすじ】

あの日から丁度一年が経った。エコの街、風都。ユートピア・ドーパントと仮面ライダーWの最後の戦いは確かに終わりを告げた。だが何を思ったのか、最悪の万物「ガイアメモリ」は再開発され、ドーパントの脅威はまるで留まることを知らない。

それを止める為、あの日から大切な相棒を失った少年は、たった一人で、仮面ライダーとして今日も戦い続ける。唯一無二の相棒が愛した、この町を守る為に。

あの出来事から数週間が経った。

明るさと奇抜さ、様々な国際料理フェアを売りにする多国籍料理店、クスクシエはあの出来事を境に、この店から、この夢見町より1人の旅人の青年が行方を晦ましてしまった。仲間達は姿を消した青年と再び笑い合う日常を取り戻す為、今日も戦い続ける。果たして彼等は仲間を見付け、迫りつつある新たな驚異を退けることが出来るのか。鍵を握るは、「火野映司を救いたい」という欲望を最も大きく持つ者なり。

これはあったかもしれない、もしもの世界の物語。本来の路線を外れたパラレルワールドは、全く異なる未知の展開へと一直線に突き進む。

貴方は今、誰も目にしたことがない仮面ライダーワールドを目にする。

キャッチコピーは「誰もが愛した正義の戦士、あの仮面ライダー達は何処にもいない」

序章×プロローグ×はじまり（前書き）

当小説は、原作を基準にしたパラレルワールドという設定になっております故、原作の物語進行とは大幅なズレが生じております。

一応、今作のWは本編終了後。000は紫のコアメダル登場後の中盤を舞台としており、これらの世界は同上に存在しています。運命のガイアメモリ、またはMOVIE大戦Coreを想い浮かべて頂けると想像し易いでしょう。因みに、二派に面識はない物とします。

しかし、話の過程が異なっており、尚且つ作者であるトマトの自己解釈等が色々踏まえられているので、今作と原作では幾つかの相違点があります。例で言うなら、オーズの使用出来るコアメダルの種類、存在していない筈の仮面ライダー等がそれに当て嵌まります。好きなコンボが登場させることが出来ないという場合も充分ありますので、どうぞその点はご了承ください。

因みにストーリーはW、000の順番で交互にストーリーを進めていきます。勿論、後に合流を果たす予定なのでご安心を。そして後書きはおまけドラマになります。DCDRをご存じの方なら、ミニミニでいけいドラマのようなものと考えて頂けるとお分かりになるかと。内容は1号から000、ライダー紹介をギャグ調で行おうというモノです。

それでは長くなりましたが、今作の本編、もといプロローグへどうぞ。1話5000文字弱の短い話ですが、最後までお付き合い頂けると幸いです。

序章×プロローグ×はじまり

薄暗い何処かの廃倉庫。

1人の男が非常に気持ちの悪い笑みを、顔に浮かべていた。

とても好青年とは言えない薄汚れた風貌をした男は、ズボンが汚れることも気にせず埃だらけの地面に座り込み、手に小さな何かを握り締めた。彼はそれを眺める度に、顔に笑顔を張り付けている。

「やつと……やつと手に入れたんだ。俺の、いや俺だけのガイアメモリ」

男は手に納めたそれをガイアメモリと称し、また笑う。

形は微妙に異っているが「A」の文字が入った、薄い直方体の小型機器。形状や先端の接続部分「コネクタ」などから、一見USBメモリに非常に酷似している。

男はそれをずっと恍惚の表情で眺め続け、手を歓喜に震わせた。

「これさえあれば、俺は幸せになれる。これを使えば、俺に薔薇色の人生が約束されるんだ」

「残念だけど、それは君を幸せになんかしてやってくれない」

その時だ。男の耳に最も聞こえなくなかった、他人の声が飛び込んできたのは。

男は慌てて腰を上げて周囲を見回し、視界に映るもの全てに神経を尖らせる。お陰で暗闇の中に一人立つ、背後の人影に直ぐに気付くことが出来た。

「何だよお前、何者だよおおっ!？」

「別に、ただの私立探偵さ。そして君にもう一度だけ言う、それは君を幸せになんかしてはくれない」

男の慌てた口調に対し、その者の口振りはとても落ち着いている。

臆て工場から差し込む光に照らされ、その声の正体はつきりと明らかになった。

「それは誰をも不幸へと導く、悪魔が造り出した最悪の代物さ」

少年だった。

全身を緑の服に包み込み、胸からは銀色の首飾りを下げている。頭には帽子が乗っているが、色が少年のイメージとは少々合致しない。黒いそれには『WIND SCALE』と文字が張り付けられていた。

男は思わずメモリを自分の後ろの腕ごと隠す。

「何だよ、何か用かよ」

「そのメモリを渡して欲しいんだ。さっきも言ったけど、それは君を幸せになんかしてはくれない」

「はあ!!!? ふざっけんなよ、こいつは俺が手に入れたんだ。誰がお前なんか」

そう言い掛けた途端、男の顔にじわじわと笑みが浮かぶ。

「そつだよ。お前でこのメモリの凄さを試してやる。そつすれば文句を言う奴もいなくなる」

アロー
ARROW

ガイアメモリを起動させ、自らの頬にそれを当てる男。一瞬にしてそれは男の頬に吸い込まれ、彼の身体を異形の物へと変化させる。人とは到底思えない赤い身体、特徴的な右腕は矢を射る弓を想わせる。

『お前なんか、こいつで貫いてやるよ』

右腕を撫で、妙におどろおどろしい声色になったアロー・ドーパントが構える。

対し、少年は深い溜め息をつき、仕方がないなと懐からL字状の赤い何かを取り出し、腹部に当てる。寸座に腹部へと巻き付き、1本のベルトと化した。

「悪いけど君をこのままにしておく訳にはいかないんだ 僕の相棒の為にもね」

更に上着のポケットからまた何かを取り出す。緑色のそれ、『C』と書かれたそれは、少年が先程悪魔の代物と批判したガイアメモリに間違いなかった。

『ま、まさかお前もガイアメモリを!?!』

「ああ。だが僕は決してドーパントなんかじゃない」

起動スイッチを押すと同時に『CYCLONEサイクロン』と内蔵されている電子音声、ガイアウィスパーの音が響く。

少年は何処どこか寂しそうな眼差しで起動させたメモリをL字型のベルトベルトの差し込み口に装填。考え込むようなポージングでドライバーを展開する。

「変身」

CYCLONE

少年、フィリップを螺旋状に包み込む緑の風。同時に風が巻き上げた緑の粒子が彼の身体に張り付いていき、次の瞬間には少年の姿は消え、全く別の存在がアロー・ドーパントの前に立っていた。

全身を覆うメタリックなグリーン、額には白銀の『W』を模した角、美しくに輝く両の赤い複眼、背中の銀の布、ウインドスタビライザーがマフラーのように風に靡く。

『何だよお前。その姿……ホントに何者なんだよおっ!?!』

怯えた声を上げるアロー・ドーパント。身体が震え、足も僅かに後退する。

対し、緑の風の戦士は対峙するドーパントに向かって、決断に溢れた口調でこう言い放った。

「僕は……仮面ライダー、仮面ライダーサイクロン!」

序章×プロローグ×はじまり（後書き）

『Kの必殺技／1号の技は48種類』

俺の名は左翔太郎、私立探偵だ。……決して左翔太郎（故）ではない。

突然だが、フィリップが頭を強く打った。どうやら、また検索にハマリ、事務所の冷蔵庫から卵と牛乳と味噌と豆板醬トウバンジャンを取り出そうとして、過って中身がたふたと満タンに詰まったペットボトルを運悪く頭の上に落してしまっただけらしい。何をしようとしていたのか、非常に気になるところだが、これだけならまだ良かった。

問題は、フィリップの中に蓄積されていた様々な記憶が、その衝撃で、まるで水の上に垂らされた絵の具のようにごちゃごちゃに濁り混ざってしまったということだ。

例えるならあいつの頭脳は、正にコンピューターの如き精密機器ほんの僅かな衝撃を与えられただけでも軽くフリーズ、酷ければ完全にショートしてしまう。

お陰で、今のフィリップは単純な足し算から、俺達仮面ライダーのことまで、色々な事柄がごちゃごちゃになってしまった。地球の本棚の全ての本も、一気に傾れ落ちてしまったのだ。

俺はフィリップの混乱した記憶を本来の正常な記憶に戻す為、リハビリを兼ねて仮面ライダーの知識を改めて叩き込むことになったのだった……。

「よし、まずは基礎の基礎から学んでくことにするかフィリップ」

「解ったよ翔太郎。それじゃあ早速教えてくれ、その仮面ライダーについて！」

「仮面ライダーだ、仮面ライダー！！のっけから盛大に間違っ

んじゃねえかつー!!」

俺は不安を隠せないままに、仮面ライダーの基礎の基礎、偉大な初代仮面ライダーこと、「仮面ライダー1号」についてフィリップに教えることにした……。

仮面ライダー1号。それは本郷猛が変身する、最高に偉大な先輩戦士の名前だ。

だがそれも、決して望んで手に入れた力じゃない。バツタを想わせるその変身後の姿は、宿敵組織シヨツカーの陰謀により得ざるを得なかった姿なんだ。奴等に目を付けられてしまった本郷猛は改造され、怪人の姿を得ることになってしまった……。

だが彼は運良く、最終にして最重要項目である脳改造を施される前に脱出に成功。それからはシヨツカーを倒す為、孤軍奮闘することになる。仮面ライダーの長い歴史はこっから始まったと言っても過言じゃない。

改造された悲しみを仮面の下に隠し、一人戦う彼のその様は、言うなればそう

「シヨツカーという強風に挑む、一陣の風。……それが仮面ライダー1号だ!」

「仮面ライダー1号。身長180cm、体重は70kg。成る程、これはとても興味深いね」

どうやら落ち着きを取り戻しつつあるらしい。俺が見る限り、フィリップの頭脳は順調に回復の道を進んでいるようだ。もう次の段階に進んでもいいだろう。

「それだけが1号じゃねえぜフィリップ。彼は48もの必殺技を備えてるって話だ。言うなれば、正に技のデパート。シヨツカー以降の組織からも、『技の1号』の二つ名で恐れられたそうだ」

「48もの必殺技だって!? 基本、僕達仮面ライダーは一つの姿につき一つの必殺技を持つのがメジャーだというのに、それが48だって!? それはとてつもなく興味深い、心がゾクゾクするねえ!」

どうやら上手くフィリップの心を掴んだらしい。まあ、この俺程のハードボイルドともなればフィリップの心の一つや二つ掴むなんてことは朝飯前だが おっといけねえ、思わず笑みが顔に出ちまっただぜ。

そんじゃま、とどめ ジョーカー 切り札の登場と行きますか。

「仮面ライダーの必殺技といえば、最も有名なのはやっぱり『ライダーキック』だ。キックこそライダーの武器、俺達Wも『ジョーカーエクストリーム』という強烈な必殺技を持ち合わせている」

「やはり、ライダーといえばキック。バッタの強靭な脚力、という訳だね翔太郎」

「だが、キックだけが1号の技じゃねえ。確かにキック一つといっても様々な種類があるが、他にも彼は強烈なパンチ技、チョップ技、更には投げ技まで備えてるんだ」

「投げ技? 仮面ライダーが投げ技を繰り出すのかい!? それは是非とも知りたいよ翔太郎!」

もうここまでくれば、勝ったも同然。例えるなら、大富豪で手札に2とAが3枚ずつ来てるようなもんだ。

「そう急かすなってフィリップ、今から説明してやる。良いか? 1号の投げ技はスタンダードな一本背負いから」

その後、俺はフィリップに仮面ライダー1号の全てを伝えた。取り敢えず、俺の伝えられる知識の全てを奴に叩き込んだつもりだ。一先ず、こいつが何処まで把握出来たのか、確かめる必要がある。

俺はフィリップがどれだけ理解したのかを訪ねた。

「バッチリだよ翔太郎。仮面ライダー1号の全てを閲覧した。先ず

1号は改造人間で、本郷猛が変身する」

「どうやら基本的なことは理解できたらしい。俺の口から安堵の溜め息が出る。」

「48の技を持ち、技の1号という名の異名で敵組織から恐れられている」

「そうだフィリップ。その通りだ」

「稲妻のような軌道を描きながら敵に叩き込む『電光ライダーキック』。空中高く舞い、ムーンサルト状態から放つ『ライダー月面キック』」

「良いぞフィリップ。お前の言う通り、1号のキック技は正に芸術モンだ」

「更に片手で放つ『ライダーパンチ』は基より、上空から繰り出す『フライングライダーパンチ』」

「そうだそうだ。パンチだからって侮っちゃいけない。1号の技はどれもキレが凄まじく威力も高いんだからな」

「他に投げ技も充実している。相手の両股を手で掴み、頭上に逆さに持ち上げ、そのまま高く舞い上がり、一気に臀部から着地する、

1号の投げ技の中でも抜きん出た強烈必殺技」

「その通りだ。その技はな、特に相手の首をへし折るのに最適だ……って、はい？」

聞き間違いだろうか、フィリップが妙なことを口走った気がする。気分的にいえば、大富豪で後残り2とAしか存在しない手札状況下で、唐突に相手に革命をされるような感じだ。

俺が違和感に顔を歪ませているのも気付かず、相棒はつらづらと当たり前のよう言葉を重ねる。

「首折りに加え、股裂き、背骨折りの三大技をミックスさせた正しく1号最強の投げ技。真名『五所蹂躪絡み』、またの名をキン肉バ

「言わせねえぞフィリップウウウウッ！！！！ その先は絶対^{ぜってえ}に言わせねえからなあああッ！！！！」

……どうやら48という数字から、また色々と面倒なことが起こってしまったらしい。俺は、さも自然にフィリップに向かって関西出身の亜樹子顔負けのツツコミを披露していた。

俺が甘かった。ケーキにシロップかけて粉砂糖まぶす並みに甘かった。フィリップのバグリ方は俺の予想を越え、尋常じゃないレベルに達していたのだ。

「つうーかそれ別作品、別の48の技だから！ しかもはや投げ技じゃなくて激突技だしっ！？ そんなもんライダーの力でやったら、背骨折れるとかそんなレベルじゃ済まねえぞ！？ 軽く死ぬるわ！！！」

「そして着地後、相手の心臓目掛けてライダーキックを叩き込む。実はこの時、ブーツの裏に仕込んだ時限式爆弾を相手に取り付け、さもキックを受けて爆発したように」

「ただ無情なんだよ仮面ライダー！！ お前、ライダーがそんなことしてみろ！ 全国の応援してくれてる大勢のファンの子供達が泣くぞっ！？ 一瞬で深夜番組に叩き下ろされんだろおーがあっ！！！」

こうして、結局今回は失敗に終わってしまった訳だ。フィリップを正常に戻すことが、俺には出来なかった。

だが俺は諦めたりしない。こいつは俺のかけがえのない相棒、絶対に失う訳にはいかねえ大切な存在なんだ。

この俺、左翔太郎が存在する以上、一刻も早くフィリップを正常に戻してみせる。

そう、ハードボイルド探偵であるこの俺が

「翔太郎！ 知っているかい？ 実は仮面ライダー1号が途中降板した訳は、実は彼がライダーでありながらバイク事故を」
「んなああくっ！！ お前はもう黙ってるおっ！！ 全国少年少女の夢を、俺の憧れのヒーロー像をこれ以上壊すなああっ！！」
多分、な。

第1話 その名はC / 悲しみのシングルヒーロー

2010年、○月×日。闇の巨大資本組織として知られる財団X、当組織は稀に見る損害を受けた^{かす}人面的被害である。組織内でも有能な人材として評されていた加頭順^{じゅん}ことユートピア・ドーパントが仮面ライダー^{ダブル}Wと交戦して死亡、消滅したのだ。

それを傍観していた加頭の上司に当たるネオン・ウルスランドからの報告を受け、財団上層部はガイアメモリの秘める更なる可能性に絶大な興味を覚えた。

数カ月に渡り、財団Xは総力を掛けて、以前制作されたT2ガイアメモリをも遙かに凌駕する、新たなる新世代ガイアメモリの製造に取り掛かった

結果、新世代ガイアメモリ、AからZまでの記憶を秘めた26の「T3-メモリ」が完成。端子部分が黄金で制作されていることから、「Gaia Memory」の頭文字を捩り、G・M^{ゴールデンメモリ}とも巷では称されている。

聽てその存在は、財団X自身が漏洩させることにより、都内に流通。ガイアメモリを所持することは超人へと変わることだと無知な都民は刷り込まれ、現在では高校生でも入手しようと試みる者も存在する。

中でもゴールデンメモリは噂と注目の的。メモリ所持者にとつて憧れの代物、AからZ問わず、一つでも持てば最高の英雄として崇められる。全資産を取っ払ってまで手に入れようとする者も少なくはない。正しく血眼になって探される対象として、T3ガイアメモリは確立しつつあった。

そして1年の時が流れた。

まるで舞いを踊るように、華麗で強烈、かつ素早い回し蹴りをフリップ扮する仮面ライダーサイクロンが、背部のマフラーを靡かせながら男の変貌したアロー・ドーパントに幾度となく叩き込む。

緑の風刃を帯びた右足は見事に怪人の頭部を捉え、炸裂する度に彼の口部からくぐもった悲鳴を上げさせる。遂には禍々しい身体をドサリと倒れ伏せさせた。

「っの野郎!!」

苛立ちを吐き出しながら、怪人はその特徴的な右腕から、鋭く細かな青白い一閃を放つ。

だがサイクロンはそれをも身軽な身体を活かしていなし、再び軽々と怪人をあしらい始めた。

「君の能力は既に検索を終えている。そもそも、その容姿で右腕を警戒するな、という方が無理な話だ」

「くそっ！ ふざけやがって コレでも喰らえッ!!」

言って、今度は幾つもの閃光をサイクロン目掛けて連続で飛ばす。言動から、これがアロー・ドーパントの誇る最強の技なのだろう。

しかし、それさえもサイクロンには通じない。風を帯びた両足が、次々に実体のない筈の閃光を薙ぎ払っていく 臆て全ての矢が彼の両足によって地に叩き落とされた。

そのまま彼は柔らかく手を握り、口元まで持っていき、怪人に向けて言い放った。

「残念だが、君と僕とでは戦闘経験の差が大き過ぎる。所謂、踏んだ場数の差が違い過ぎるんだ」

「だ、黙れええッ!!」

突進を仕掛けるアロー・ドーパントだが、サイクロンの言う通り、戦闘経験の差が彼とは違い過ぎた。

長年に渡り、戦い続けてきたフリップと異なり、男はつい最近メモリを手にするまで、普通の人生を送っていたのだ。一朝一夕で覚えた攻撃はあまりにも単調で仕掛けるタイミングも遅い。

知的、尚且なほつ身軽で、経験も豊富な者を相手に通じるものではないのは明瞭だ。その差を証明するかの如く、サイクロンは怪人の胴体に鋭い蹴りを押し込むように叩き付けた。

刹那、怪人の身体は大きく後方へと吹っ飛ぶ。背中を打ち付け、彼は地の上で呻き、もがいた。

「これで決めよう、メモリブレイクだ」

L字型のバツクル、ロストドライバーに装填されたメモリを引き抜くサイクロン。手首のスナップを活かし、彼はそれをドライバーの右腰部にある装填口、マキシマムスロットに再装填し直した。

サイクロン
マキシマム
CYCLONE・Maximum Drive

背部で摩くマフラーと同様、彼は風の吹くままに、と右腕をしなやかに伸ばす。次の瞬間、先程まで下半身に帯びていた風とは段違いの強い緑の風のエネルギーが、サイクロンの右手を包んだ。

「ライダーチョップ」

素早く手刀を構え、狙うべき個所を定めて精神を落ち着かせる。

「見えた！」

素早く駆け出し、彼は風で覆われた右手を素早く振るい、アロー・ドーナントに横一閃を仕掛ける。

「あ、あぐ、あ」

刻まれる横一文字の鋭い刀傷。サイクロンの必殺技を受け、怪人は爆発を引き起こす。同時に、彼が使用していたガイアメモリ、アローメモリも排出と同時に罅割れ、地に落ちると同時に粉々に砕け散った。

変身が解除され、炎の中に倒れ込むアローの男。メモリブレイクの後遺症の為にかなり衰弱し、息も絶え絶えだが、命に別条はない……サイクロンも静かにスロットからメモリを引き抜いた。

変身の際と同様、穏やかな風が彼を包み、緑の粒子となって仮面ライダーサイクロンの姿が剥がれ落ちていく。風が止んだ時、緑の

戦士の下からフィリップが姿を現した。

彼は倒れ伏せている男をちらと見ると、未だ煙を上げるメモリに目を落とそうと腰を下ろした。

「……一般のガイアメモリ。T3メモリではない、か」

残念そうに言うフィリップ。戦いの疲労からか、T3ではない事実にか、彼はふうと溜め息を溢す。

そのまま上着のポケットから変に分厚い黒の携帯電話を取り出した。

「もしもし、照井竜？ 今回のガイアメモリ事件の犯人だけど」

フィリップの連絡から数分後、やって来た救急車によって、男は警察病院に搬送されていった……。

日本の何処かにあるエコの街。至る所に風車が見受けられ、多くの住民からも多大に愛されている風の都市。その名も風都。

この街では、素朴幸せの日毎で小さな幸せも、悲劇ガイアメモリ事件的で大きな不幸も、常に風が運んでくる。本当に気まぐれな風を前に、人々は時に笑い、また涙を流す日々を送っていた。

そんな都内に建つ一軒の古びた玉屋、名はかもめビリヤード場。その2階を拠点とする探偵事務所、それが都内でも有名な此処ここ、鳴海探偵事務所である。今、そこにフィリップは居た。

彼はたった一人で、事務所の奥のデスク、回転式の椅子に腰を下ろしていた。台の上には、黒々とした珈琲が注がれたカップと共に旧式のタイプライターが配置されている。彼はそのキーの一つ一つを両手で素早く、かつ丁寧にローマ字ではなく、きちんとした英文を打っていた。

「よし。これで今回の事件の報告書は完成した。後は」

自分を褒め称えるように声を発し、表面にユラリと波紋が浮かんだカップに手を伸ばす。ソファアの上で丸くなっている猫が眠たそ

うに鳴いた。

「そうだね。後でミックの好物、レジェンド・デリシヤス・ゴールデン缶を買い足しておくでしょう」

口に含んだコーヒを喉に流し込み、思わず物思いに耽るフィリップ。寂しそうな眼差しで、事務所の中を見回す。「僕一人と猫一匹に、この事務所はやっぱり広過ぎる」、彼は呟かずにはいられなかった。

「やつほく、フィリップくんいる〜?」

そこへ訪れる1人の少女。僅かに茶が混じった黒い髪を後ろで纏めており、羽織っている子供っぽい服装も童顔と相まって彼女を一回り若く見せている。中学生と判断されても何ら不思議もないだろう。

同時に、ソファアで丸くなっていた猫のミックが、ひっそりとその裏に隠れた。

「やあ、こんにちはアキちゃん。今日はどうしたんだい?」

「ん〜、別に用っていう用はないんだけどね。あたしだって所長なんだし、顔は毎日きちんと出しとかないと」

「何だ。アキちゃんのことだから、また照井竜との惚気話かと思っただけだ?」

「にや、にやにおっ!? もうフィリップくん、事務所の所長をからかわないの!」

少女、鳴海亜樹子なるみ あきこにクスリとした笑みを浮かべるフィリップ。

だがその笑みには、やせ我慢が潜んでいるように亜樹子には思えた。1年前のWにとって最後の事件、あの日の出来事が、未だに彼を苦しめ続けていることを彼女は理解する。

「あ、あのさフィリップくん」

「ん? 何かなアキちゃん?」

「無理だけはしないでね。私も竜くんも、皆何時でもフィリップくんの力になるから、ね?」

「ああ、有難うアキちゃん。……でも僕なら大丈夫だ。僕は翔太郎

とは違うから」

フィリップの声に、一瞬僅かな影が差す。勿論、亜樹子はこれも見逃さなかった。

だが、彼の表情は一瞬で明るさを取り戻し、室内の重い雰囲気を一変させて彼女に話し掛けた。

「それより、照井竜の許へ戻らなくていいのかい？　もう直ぐ、彼のとの結婚式なんですよ。だったら打ち合わせとか、準備だって色々ある筈だよ」

「あ、うん。……そうだね」

彼の内心を悟ってか、はたまた一転した空気への戸惑いか、亜樹子はこれ以上何も言葉を繋げようとしなかった。踵を返し、「また来るから」という小さな一言を残し、彼女は事務所を慌ただしく立ち去る。

妙に騒々しい靴音が聴て耳に届かなくなり、改めて事務所内にはフィリップ一人だけが取り残された。

再び静けさを取り戻す事務所内。ふう、と自嘲気味の溜め息をつき、彼はデスクの引き出しを開く。

収納されていたのは幾つかのガイアメモリ。骨型の装飾が施されていない、寧ろ自分が使用しているメモリと似ているそれ等には、黄金の先端部　紛れもないT3メモリだった。

「僕が持つT3メモリは、照井竜アケセルとの共同で回収した9個。後、まだ17個ものT3メモリが風都の何処か、もしくは既に都外にも出回っているかもしれない。……早く全てを回収しなくては」

「翔太郎の為にね」と決意を新たに、静かにデスクの引き出しを閉じ、手元の黒い帽子を頭に乗せる。鍰が目元を隠すように深々と頭に押さえ付け、目を柔らかく閉じて、わざとらしく深く息を吐いた。

思い浮かぶは、この世で唯一無二の相棒の顔。黒い帽子が最も似合う、未熟だが自分にとって最高の相棒　左翔太郎ひだりしやうたろう。

フィリップは思わず、自分に微笑みかける彼の顔に触れようと手

を伸ばした。

だが、それも淡い幻の夢。少しでも目を緩めれば、光という現実が元の事務所へと彼を引き戻す。フィリップは悔しそうに拳を強く握り締めた。

左翔太郎は、都民に愛されたあのハーフボイルド野郎はもう何処にもいない。

彼は文字通り消えてしまったのだ。この風都から、世界から、地球から。……こんな自分を救う為に。

もう、どれだけ後悔したか解らない。最初は不甲斐ない自分への怒り、耐え切れない悲しみに自傷行為を幾度となく行った程だ。手首、二の腕、肩辺りには、まだ生々しい傷跡が残っている。

『約束　お前と最後まで相乗りするってヤツ、守れなくて悪いなフィリップ』

彼が自分に宛てて残した最後の言葉。これまでに何度思い起こし、その度に悔しい思いをしたか。……そして何度同じ行動を繰り返したか。

刹那、フィリップは無言のままデスクから緑色の薄めの円柱型ツールを取り出し、専用のギジメモリを後部に挿入した

F r o g

同時に変形するツール。その形状はフロッグの名の通り、蛙を彷彿とさせる。

『行くぜ相棒！』

過去にギジメモリに保存されていた音声データを忠実に発するフロッグポッド。間違える筈がない、今の声は紛れもない左翔太郎の声だ。機械の蛙は、次々に彼の音声データを再生していった。

『如何なる状況でも情に流されない鉄の男、それが　ハーボイルドさ』

『ハーフじゃねえっ！　ハーボイルドだあっ！』

「ハーフボイルド、か。これじゃあ僕、人のこと言えないよね、翔太郎……」

「てんめえ……亜樹子おおッ!!」

フロツグポッドの音声データに耳を傾けながら、デスクに突っ伏すフィリップ。伸ばした腕を折り曲げ、頭を沈み込ませた。

「俺達は2人で1人の探偵で、仮面ライダーだ！ さあ、お前の罪を数えろ！」

言い慣れている筈の決め台詞。誇りに感じていた仮面ライダーW。それも、今のフィリップには相棒を失ったことへの負の感情を増幅させるだけの要因にしかならなかった……。

第1話 その名はCノ悲しみのシングルヒーロー（後書き）

『アंकと2号と相違点』

それは、普段通りの日常を送る筈だったクスクシエで起きた出来事だ。

比奈と知世子は食材の買い出し。後藤は飾り付け用の機材の購入。映司もテーブルの配置の調整。そして相変わらず手伝いもせず、アंकは1人スマートフォンを使って興味のある情報を集めていた。

またコアメダルの情報についてか、何かだろうと映司は予測する。最近では携帯アプリの取得方や使い方まで覚えていたし、彼は自身の欲望の為となると本当に脅威的な速度で何でも学習してしまうらしい。……これには欲望を重視する鴻上也酷く感心していた。

深刻な顔で画面に指を滑らせるアंक。次の瞬間、彼は映司に向けて冷たい口調で言葉を放った。

「オイ映司！ …… 『仮面ライダー2号』ってのは何だ？」

「え？ 仮面ライダー2号？」

「そつだ！ さっさと教える！」

映司は突然のことに顔を間抜けに歪ませる。こうなったアंकが知らずのまま黙る筈もなく、それを理解していた彼は仕方なく仮面ライダー2号について説明を始めた。

仮面ライダー2号。それは一文字隼人が変身する、1号に並ぶ尊敬に値する戦士の名称である。

彼は秀でた多彩な才能と、1号である本郷猛との面識を持つという理由で、シヨッカーの改造対象として組織によって捕獲。肉體改造と洗脳措置を経て、1号を倒す為に組織された兵士部隊、シヨッ

カーライダーの一兵士、No.12として本郷と戦うことになってしまう。

だが、1号との戦いで洗脳は無事に解除。以後はヨーロッパにシヨッカー殲滅の目的で旅立ってしまった本郷の代わりに、新たな仮面ライダーとして、仲間達と共にシヨッカーと激戦を繰り広げることとなる。

「技の1号」に代わる新たな力の戦士、「仮面ライダー2号」として

「簡単に纏めると、こんな感じかな？ 変わらない容姿、必殺技、能力値も相まって、2人揃った彼等をダブルライダーの異名で、敵側はかなり危険視してたって話だよ」

「ほお、成程な。つまり2号と1号は色々な意味で殆ど変わらないって訳か」

「まあ、そういうことになるのかな」

興味深そうに声を吐き出すや、アंकは液晶画面に視線を戻す。何を見ているのかは、映司の立ち位置からでは解らない。表情からも何の感情も読み取れない。

「で？ 結局何が違うんだ？」

「は？」

「だから、結局1号と何が違うんだ？」

「え、えくと、それはねえ」

真剣な顔で睨むように見詰めてくるアंक。映司は思わず返答に困った。

傍から見れば殆ど同じ容姿。能力までも同じとなれば、あげられる部分なんて変身者の違いくらいしかない。（平成ライダーは知ってるんだけどなあ 映司談）

「オ、オリオン大星雲とイータカリーナ星雲くらい違う、かな？」

「……知らないんなら、素直にそう言え」

2号と1号の差異は変身者の違いを除いても色々ある。

まず、一般的に知られるのがスーツを走る白字のライン。実はこれはジャンプ力強化のバネ、パワーラインを表わす等の説があるがこれが1号と2号は違う。1号は2本、2号は1本なのだ。他にもベルトの帯の色が赤いといった特徴が2号には上げられる。

後に2号も1号も旧型より新型へ。所謂新1号と新2号へと進化。暗い配色から明るめの配色に代わり、違いは更に明確化する。ブーツ、グローブの色が赤色になったのである。だが、1号との違いをより明確化するため、過去の暗めの配色のマスクを使用することもある。(詳しくはMOVIE大戦 MEGA MAXを)

そして最大の違い、それは旧型の頃から2号のベルトには1号には無い風力備蓄機能。更に使用されているダイナモは1号の物より直径が大きいということである。何を隠そう、これがあつての変身ポーズであり、2号は初期の1号と異なり、能動的に変身することが可能となっているのである。(後に1号も同装備に再改造されている)

つまり、仮面ライダー2号は現仮面ライダー、フォーゼまで受け継がれる、「変身ポーズ」の創始者なのである

「成る程！ つまり仮面ライダーの元祖は仮面ライダー1号だけど、変身ポーズの元祖は仮面ライダー2号なんだあゝ」

「お前、自分も仮面ライダーの癖して、そんなことも知らなかったのか」

「う、煩いなあ！ お前だって俺の相棒役の癖に知らなかったじゃないか！」

「……何時から俺がお前の相棒になった」

顔を若干赤く染め、強めに言葉を発する映司に、アंकは呆れを

含ませて口頭を上げる。

対し、映司は大して可愛くもないのに頬をぷくりと膨らませた。わざとらしく腕を組み、首を横に捻って横目でいやらしく笑みを浮かべる彼の表情を伺う。アंकはいやらしい笑みで自分を嘲笑っていた。

次の瞬間、思い付いたような彼の発言に映司の顔は凍りつくことになる。

「んで？ 仮面ライダー1号と仮面ライダー2号、結局どっちが強いんだ？」

アंकの好奇心という名の欲望は治まる、限度という言葉を知らない。有無も言えずに付き合わされ、映司が再びウンウン唸るのは、その直ぐ後のことだった。

第2話 過去と現在と何も出来ない無力感(前書き)

Count The Medals 現在、オーズが使える

メダルは……

ヘッドメダル：タカ・コア×2、サイ・コア、シャチ・コア、プテ
ラ・コア

アームメダル：クジャク・コア、トラ・コア、ゴリラ・コア、ウナ
ギ・コア、トリケラ・コア

レッグメダル：コンドル・コア、バッタ・コア、ゾウ・コア、タコ・
コア、ティラノ・コア

第2話 過去と現在と何も出来ない無力感

物語の始まりは800年前に遡る。当時の優れた錬金術師達が、人口生命体の誕生を目的に創り出した10枚のコアメダル。彼等はそれぞれ七群のメダルをこの世に放った。

この10枚より1枚を抜き取ることで、誕生する存在があった。グリードと呼ばれる存在がそれである。

アンク、鳥系、昆虫系、猫系、水棲系、重量系、それぞれ5人のグリード。9枚という欠けてしまった部分を満たしたいという欲望が彼等の全てである。彼等5人は欲望を満たす為、自意思を持ち、メダルを肉体としてこの世に誕生した。

だが、そんな彼等の欲望が満たされることはなかった。800年前には彼等のコアをすべて集めようとする、グリード以上に欲深い存在、正しく欲望の塊とも言うべき存在がいた為である。その名もオーズ。

そもそも彼の欲望から、グリードは誕生したのである。彼は世界を支配する力を欲した。未熟で不完全な人間から、神へと昇華する為に。故に様々な生物の力を秘めたコアメダルを手に入れることを望んだ。

その為に、オーズはグリードの一角であるアンクと手を組み、他のグリード達から次々にコアメダルを奪った。終いには結託した筈のアンクをも裏切り、彼からもメダルを奪取してしまう。……彼の目的は達成されたかに思われた。

しかし、全てのコアメダルを体内に取り込んだ結果、オーズは力の制御が叶わず暴走に終わってしまう。

メダルを封印する石棺の一部として、彼はその生涯の幕を閉じた……。

それから約800年後、時は現代へ。グリードは再び欲望を満た

さんと蘇った。

仮面ライダーオーズと共に。

2011年、 月 日。

この日、悲劇は突然やってきた。恐竜系コアメダル3枚が、2代目オーズこと火野映司ひのえいじの体内に吸収された数日後のことだ。

それは東京都内、とある遊園地で起きた出来事。グリードの身体を構成するセルメダルを増殖させる為に彼等が用いる怪人、ヤミーを倒そうと、オーズである火野映司と、仮面ライダーバースである伊達明だてあきひが戦闘を始めた。

相手はこれまで類のない、プテラノドンを模したプテラノドンヤミー。所謂いわゆる、恐竜系のヤミーで映司達にとっては初めて相手をするタイプのヤミーであった。

しかし、その力は普段のヤミーとは比較にならない程強力で、次第に2人は劣勢を強いられてしまう。バースは身体から火花を散らし、オーズに至っては変身解除にまで追い込まれた。……正に絶体絶命だった。

だがその時、不思議なことが起こった。映司の瞳が突如として紫に輝き、体内から侵入した3枚のコアメダルが排出されたのだ。それ等は、彼の腹部に装着されたドライバーへ飛び込んでしまう。

虚ろな瞳で空を見る映司を他所よそに、右腰部のオースキャナーは、自動的に3枚を読み込んだ。

『プテラ！ トリケラ！ ティラノ！』

『プ・ト・ティラノ ザウルス！』

凍てつくような獣の咆哮と共に姿を現したのは、800年前に共闘した経験を持つアंकでさえ、未だかつて見たことのない、恐竜を思わせる紫の装甲を纏いしオーズ。彼は参上すると同時に、まるで自分が本物の恐竜にでもなったかの如く、天に向かって大きく吠

えた。

そしてこれが悪夢の始まりだった。

それから数週間後。場所は夢見町にある、各国の料理を日替わりで振る舞う多国籍料理店へと移る。名はクスクシエ。

「おはようございます」

そこへ訪れる1人の長い黒髪の華奢な少女、名前は泉比奈いずみ ひなという。クスクシエでオースである火野映司と共に、クスクシエで働く非正規雇用員ルバイトの1人である。

「あら比奈ちゃん！ もう身体の方は大丈夫なの？」

言つて出迎えるは、これまた30歳程の女性だ。温厚そうな口振り、何処か姉御肌を思わせる雰囲気を醸し出す彼女の名は白井知世子しろいし ちよこ、当店の主である。住所不定な者でも軽く受け入れる、器の大きな女性として、巷ちまたでもかなり有名な女性だ。

傍では既にもう一人の非正規雇用員である、後藤慎太郎ごとうしんたろうがテーブルを丁寧ていねいに台拭き用の雑巾で拭いている。彼も、店に訪れた彼女に軽く首を振つて挨拶を交わした。

「心配したわよ。でも良かったわ、包帯も取れたみたいだし ホント良かった」

知世子が彼女に言った「大丈夫」とは、数週間前に負つた大怪我についてだ。対して比奈は少し目を逸らし、遠慮がちに肯定している。後藤も同じ心地なのか、ひたすらに台を布で擦るように吹いている。

数週間前、比奈は大怪我を負つた。見るも絶えないその様子に、流石の知世子も絶句したものだ。

何せ、突然伊達や後藤達が店に傾れ込んできたかと思うと、その伊達の背中に、息絶え絶えになり、右肩から大量の血を夥おびただしく流し、彼の服を赤く染める比奈が背負われていたのだから……。

当然、比奈は慌てて病院に搬送、後に入院。大量出血による衰弱、傷口も深く、肩の骨を砕き、鎖骨にまで罅が入った危険な状態というところが、医師からは伝えられた。誰もが蒼白とした顔で、受け入れ難い現実を受け止めていた。

中でも、映司は特に痛ましかった。赤い染みを拭うことも忘れて身体を震わせ、濡れた声で「俺の所為だ」と何度も繰り返して呟き続けていた。……まるで壊れた人形のように。

その後、比奈は奇跡的に一命を取り留めた。担当医が言うには、もう少し傷が深ければ助からなかったことだった。映司はその際にも、顔を悲痛色に染めていた。

その後、火野映司はクスクシエから、夢見町から忽然と姿を消した。

「あの、知世子さん。あれから映司君から何か連絡は」

比奈の問いに知世子は首を左右に振る。

「残念だけど、あれからこの町で映司くんを見たって人はいないって。……でも、きっと大丈夫よ！」

自身の性に合わないのか、はたまた頑張って暗い雰囲気をもるものへと一変させようという、彼女の姉御肌な気性がその言葉を発せさせるのか。兎に角知世子は、皆の顔に少しでも笑みを張り付けようと、明るく振る舞った。

「だって、あの映司くんだもん。きっと……きっとまた、この店に帰ってきてくれるわよ」

「当然だ」

そこへ、更に別の声が割り込む。鋭く冷たげ声質、不機嫌そうな口振りから、声主を割り出すのは、そう難しくはなかった。

「あら、アンクちゃん！ おはよう」

金色の頭髪を、まるで鶏冠のように粗く右へ流した青年の肉体。

鋭く睨み付けるような目つきで、アンクと呼ばれた彼は2階の寢床と店内を結ぶ唯一の階段を下りる。コツコツと靴音が静かな店内に響いた。

「あの馬鹿には、まだやって貰うことが山ほどある。必ず見付けて、首輪付けてでも連れ戻す！」

知世子からの挨拶を無視し、アंकは右拳を強く握り締めて低く唸る。周囲に宣言するように言葉を発すると、彼は苛立ちの感情を表出させて店外へと出ていった。

「やっぱり、アंकちゃんも映司くんがいなくなって寂しいのね」
「……あいつが、そんな可愛げのある奴には見えませんがね」

「本当に知世子の目には、アंकという人物はどのように映っているのか」、そんな疑問を感じつつ後藤はテーブルの上に布を滑らせた。

片や比奈は、何か思い詰めたかのような顔をして俯いている。店内はまた静けさを取り戻した。

「開店前だけど、ちよつとごめんよ」

その時だ。戸が外側から唐突に開かれ、見知った顔の男性客が訪れた。

革のジャケット、短髪に口元には同じ色の髭。背中に巨大なドラム缶のような物を担ぐ彼の姿は、正しくダンディと評するに相応しい。そんな彼を後藤は「伊達さん」と呼称した。

伊達は軽く手を翳して一同と挨拶を交わすと、直ぐに奥で台拭きを続ける後藤に目を移した。

「おお、いたいた。後藤ちゃん、ちよつといい？ ……コレなんだわコレ」

言って彼は人差し指をピンと立てる。後藤は、伊達が何を言いに来たのか直ぐに理解することが出来た。

「解りました。知世子さん、勝手ながら少しだけ時間を頂いても構いませんか？」

対し知世子は、少々戸惑いながらも首を縦に振った。

「そうね、開店までまだ時間あるし 良いわよ。でも、ちゃんと戻ってきてね？」

「それは勿論。なるべく早く、ディナータイムまでには戻ります」

「それじゃあ知世子さん。ちょっとだけ後藤ちゃん借りさせて貰うわ」

軽くお辞儀する後藤。伊達を先頭に、2人もアंकと同様に店内から姿を消す。残るは知世子と比奈だけとなった。

「それじゃあ比奈ちゃん、私達はお店の準備始めよっか」

「……………はい」

手始めに、と2人は予め購入して置いた食材の下拵え。また今日予定されているメニューを宣伝用の黒板に多数の色のチョークで書き記す。……………比奈は後者を担当した。

様々な感情が入り交じると、逆に無表情になるらしい。白く細いチョークをその手に、彼女は鏡を覗き込むようにして黒板を見る。

手頃なサイズの黒板。来客を持って成す為の第一歩となるこれに、今は何も描かれてはいない。日ごとに異なる料理を提供するのだから、当たり前といえは当たり前だ。

比奈は思った。「自分は今、どうしてこんなことをしているのだろう」と。

自分に出来ることは、こんな程度のことだけなのか。……………思えば、あの時も自分は結局何も出来なかった。

いや、寧ろ自分がやったことは

「ちよ、ちよつと比奈ちゃん!？」

「ふえ? あっ……………」

気付けば、比奈はチョークを粉々に握り潰してしまっていた。知世子の慌てた声で我を取り戻した時には既に、彼女の掌は白く染まり切っていた。

「大丈夫? やっぱりまだ気分が優れないんじゃない」

「いえ、平気です。ごめんなさい……………」

「そう? 無理だけはしないでね、病み上がりなんだし」

「はい、すみません……………」

暗く顔を俯かせ、洗い場へと足を運ぶ比奈。蛇口の栓を緩め、吐き出される水に手を入れる。そのまま附着した粉を落とそうと、両

手を擦った。

自分にはこんな簡単なことさえ出来ないという、大きな無力感を抱きながら。

第2話 過去と現在と何も出来ない無力感（後書き）

『ライダー3号 その正体は？』

海東大樹はトレジャーハンター（自称）を名乗る強盗（実際）である。欲しいと思うものが目の前にあれば、発砲さえ厭わない本物の強盗もびつくりの男。それが海東大樹である。

…… ついでに通りすがりの仮面ライダー（これも自称）である。

意味もなく銃を構え、建物の物影に半身を隠し、標的の様子を伺う海東。そんな強盗野郎は、現在1人の男を後ろに連れていた。名は門矢士、本物の通りすがりの仮面ライダーであり、世界の破壊者と謳われし存在 仮面ライダーディケイドである。彼はとてもげんなりとした表情で、海東の背後に付いていた。

そして彼等は、現在1人の男を背後からつけまわ もとい尾行していた。

上部を白いベスト、下部にはジーンズ。青のワイシャツを着て、ズボンの後ろポケットからハーモニカを覗かせた、豹のように目を鋭く光らせた黒髪の青年だ。

「海東、今度は一体何を強奪しようってんだ？」

「人聞きの悪いことを言わないでくれたまえ士。僕は強盗なんかじゃない。狙ったお宝のみを美しく奪い去る、立派なトレジャーハンターだ」

「ほお、トレジャーハンターねえ。……お前、一度辞書引き直してみたらどうだ？」

「一々煩いね君も！ 夏メロンの大切にしているケーキを食べてしまったことを黙っていて欲しかったら、黙って僕に従いたまえ！」

夏海への弱みという銃口を向けられた土に反論は許されなかった。屈辱を堪え、彼は悔しそうに小さく舌打ちをする。……海東が自分

に向ける銃口、それが放つ銃弾の威力は身を以って知っているのだ。
「どうやら身の程を理解したようだね。そうだよ、君は僕に従うしか道はないんだ」

「……何なんだよ、お前が狙ってるっていうお宝は」
「ふふつ、そこなくちゃ」

土の態度に快感を覚えつつ、海東は例の黒髪の青年を親指で指す。顔に張り付けられた憎らしい笑みに怒りを覚えつつも、土は彼に震えた声で尋ねた。

「何だ？ あいつが今回お前が狙うお宝の持ち主だつてのかわ？」

「まあ九分九厘正解さ。彼の名は『風見志郎』、またの名を『仮面ライダーV3』」

仮面ライダーV3、それは1号の「技」、2号の「力」を受け継ぎし、風見志郎が変身する風の戦士の名称である。赤い仮面に緑の複眼、白いマフラーが主な特徴となっている。

ゲルシヨッカー壊滅後、新たに出現した秘密結社、名はデストロン。家族を怪人によって殺害されてしまい、怒りに燃えた風見志郎は、1号と2号の手によって新たな戦士として生を受ける。

家族を目の前で殺害された怒りと悲しみ、改造人間が抱える葛藤と宿命、様々な感情を胸に秘め、秘密組織デストロンと仮面ライダーV3による長い激戦の幕が上がることとなったのだ

「成程な、仮面ライダーV3か。お宝という視点で考えれば、そうなり得るのかもな」

「だろう？ 仮面ライダーの中でも屈指の人気を持つV3、正に僕のお宝に相応しい」

うつとりと恍惚の表情で呟く海東。「気色悪い」と内心呟きつつ、

士は浮かんだ疑問を声に乗せて、彼に向けて発した。

「で？ 目当ては何だ？ 『V3・26の秘密』か？ それとも『四つの死の弱点』を全て探ることか？ もしくはお前が喉から手が出るほど欲しがってる新サイクロンの後継機マシン、『ハリケーン』か？」

すると、海東は嘲笑うような笑みを顔に張り付けた。

V3は自身も知らない26の秘密、同時に致命的な四つの弱点を抱えている。

どうして自身も知らないかというと、それは機能を組み込んだ当人の1号と2号が、V3を改造した直後という物語前半で行方不明となってしまう、志郎に告げられぬまま日本を離れることとなってしまうたからである。

故に、本編のV3は自身の能力を完全に把握出来ていない、中途半端な状態で戦うことを余儀なくされてしまう。加えて四つもの致命的な弱点を抱えていることも相まって、視聴者、中でも当時の子供達から「V3は弱い」という悲しい印象を刻んでしまうことに。結果、26の秘密と死の弱点、共に徐々に明かされていくという展開は、中途半端に路線変更されてしまった。

だが、V3の能力は決して低くはなく、1号と2号の能力を基礎として、それぞれ特化している能力を更に向上させている為に寧ろ高いと言える。専用マシン、1号達が駆っていた新サイクロン号をも上回る馬力を誇るハリケーンも、彼と同様に素晴らしい活躍を劇中で披露している

右手で銃を形作り、引き金を引くように動作を取る海東。これが彼の癖であることはよく土も知っている。何かしら事あるごとに、彼は無意味にこの癖を行っていた。

海東は、先程の笑みを浮かべたまま、衝撃の宝の正体を土に言い放つ

「聞いて驚きたまえ、今回の僕のお宝は　風見志郎自身さー!!」
「……は？」

土は普通に耳を疑った、そしてブラックアウトする思考で率直に気持ち思い浮かべた。心なしか、今の自分の顔は、ギャグ漫画直しくのっぺらぼうになっている気がする。

そんな彼の動揺にまるで気付かず、海東はつらつらと流暢に言葉を並べ始めた。

「耳の穴を掃除してよく聞きたまえ土！　風見志郎、仮面ライダーV3というのは実は彼の一つの姿でしかないのさ！」

「何を言ってるんだこいつ」、土の顔はのっぺらぼうから新たな「呆れ顔」へと移行。哀れな物を見るような目で、彼は妙にミュージカル調に舞いながら説明する彼を見た。

「実はデストロンとの長い戦いを終えた後も、彼は国際秘密防衛機構に所属し、新たな4人の仲間と共に青の戦士として地球を悪の組織から守り抜き　」

土の脳裏に、心当たりのある五色の戦士の像が浮かぶ。中でも、青色を主色とする戦士が最も鮮明だ。

「更に同年には私立探偵として名を馳せ、『何でも日本一の男』として悪をズバツと挫く怪傑に　」

今度は赤いスーツに身を包んだ、「Z」を想わせる姿をした戦士がぼんやりと浮かんだ。……何故か性格的な意味で、自分は受容出来なさそうな印象を受ける。

「そして彼はその功労を称えられ、長年の戦闘経験を活かそうと国際科学特捜隊に入隊。当時、地球を守っていた戦士達の行動隊長として悪の組織と戦っている。その時の彼は、変身後の純白の姿から『白い鳥人』と異名を取っていたのさ！」

最後に思い浮かぶは、異名の通り純白の身体の戦士。変身前、元々の私服も純白で、とても今の街を歩けなさそうな格好をした風見志郎の姿。正直に言えば、これまでも例に漏れず、少し頂けないだろう。

「……だから何なんだよ」

刹那、回答は尾行中にも拘わらず、大声を上げて叫び出した。

「解らないのかいつ!? 彼は正しく戦士として いや! ぶっちゃけて言うなら特撮界のお宝!!! そんな国宝級のお宝を僕が見逃す筈がない、見逃せる筈がない!」

「ちよつとお前ぶつちやけ過ぎ」

「ああっ!!! こうしている間に、風見志郎が行ってしまった! 士が大声を出すからだぞ、僕の邪魔はしないでくれよと言わなかったかい!?!」

「いや、どう考えてもこれは明らかにお前の声がデカ」

「こんなことをしている場合じゃない。早く風見志郎を追わなければ!! もう僕の邪魔をしないでくれよ士!!」

再度、指鉄砲の引き金を引くと、海東は音なく立ち去ってしまう。士は彼のペースに付いていくことが出来ず、呆然とその場に立ち尽くし、その背中を見送った

「遂に、『誘拐』までやるようになったか、あの馬鹿は」

冷静なツッコミ一つを口から溢して。

第3話 Fは1人ぼっち／相棒のいない街

此処は何処なのだろう。全く見覚えのない謎の場所、もとい謎の空間にフィリップは身を置いていた。一先ず、可能な限り状況を把握しようと、首を左右に振って辺りを見回す。

視界から理解出来たのは、周囲が灰色一色だということだけ。灰色の靄と地面以外、他には何も存在しない、正しく無の空間。当然、自分が内包している「地球の本棚」でもない。……フィリップは思わず深い溜め息をついた。

『 フィリップ 』

その時、突如彼は背後から呼び掛けられた。聞き覚えのある声に、フィリップの顔は驚愕で歪む。

間を空けず、声の主を視界に入れようと身体を素早く背後へと振り返らせる。両の瞳が捉えたのは、先程まで存在しなかった筈の青年の姿だった。彼を前に、徐々にフィリップの息が弾んでいく。

濃厚な灰色、厚手の上着を羽織る青年。帽子の鍔で顔の殆どを隠しているが、それに記された「WIND SCALE」の文字が、彼の正体を示す確かな証拠となっている。

刹那、青年は指で軽く帽子を押し上げ、衣服との僅かな隙間から顔を覗かせた。

やはり、とフィリップが彼の名を呟く 「翔太郎」と。

『 元気そうだな、フィリップ 』

言っと、翔太郎は満足そうに笑みを浮かべて、直ぐに踵を返してしまう。そのまま一歩、また一歩と歩みを進め、目の前の相棒から離れていく。フィリップは思わず手を伸ばすが、指先に触れることさえなく、それは虚しく空を切る。

そこで、彼の意識は途絶えた。

目が覚めると、視界に映る事務所の光景は逆転していた。

「何時の間にか、僕は眠ってしまったのか」

打ち付けた後頭部を摩りながら、フィリップが身体を起こす。同時に自分が睡眠中に寝ぼけて転倒してしまったことを悟る。近くには事務デスク用の椅子、頭に乗せていた筈の帽子も、自分と同じく転がっていた。

「まあ、た妙ちきりんなモンにハマりやがって　この検索馬鹿がああつー！」

「……成る程。全てはこいつの所為、という訳か」

取り敢えず、デスク上で翔太郎の声を発し続けるフロッグポッドの鎮静させ、倒れた椅子を本来の状態に戻す。フィリップの口から一段落終えたことを表わす溜め息が漏れた。

「やれやれ、まさかあんな夢まで見るようになるとはね。一体、何時から僕はこんなに弱くなってしまったのやら」

「これも全て自業自得なのに」、そうフィリップは続けて自嘲する。眉間当たりを指で揉み解し、くつくつと自分の情けなさに笑みを溢した。

そう、これは罰なのだ。罪深き悪魔の分際で、相棒という決して求めてはいけないものを求め、人でないにも拘らず普通の生活を求め、相棒の人生を奪ってまでのうのうと生きている自分への罰。「僕は何ておこがましいんだ。君もそう思うだろ？ ……でも、もう一度だけ君に会いたいよ、翔太郎」

言って、フィリップは床に転がっている帽子を拾い上げ、頭にぎゅっと押さえ付けた……。

風都警察署、通称風都署。名称通り、風都を守る警察官が集

う場所。

戸を潜れば、正にそこは警察関係者の巢窟。多くの刑事や警察官達が、日々風都の平和を守ろうと努力を続けている。中には、ドーパント関連事件に臨もうという勇敢な刑事も存在する程だ。

今フィリップは、その勇敢な者達が大勢いる所 ではなく、その近くに備えられている風都警察病院の廊下を歩み進んでいた。業務中に名誉の負傷を身に刻んでしまった、勇敢な警察官達が訪れる場所として名を馳せているだけに、すれ違う患者の殆どは、がたいが良いものが揃っている。

「よう！ フィリップ君！」

「ああ、刃野刑事。御無沙汰です」

この刃野幹夫しんの みきお刑事もまた、例に当て嵌まる。彼はドーパント関連事件を捜査対象とする、超常科学捜査課に属する一刑事であり、フィリップや翔太郎の良き理解者でもあった。

軽く手を振りながら、フィリップに歩み寄る刃野。上着の前を全開にした、少々だらしなく取れる容姿。普段から携帯しているツボ押し機も健在で、彼はそれを器用に扱いながら、持病である肩凝りを解している。背後には、刃野の部下であり、半ば腰巾着と化している真倉俊刑事まぐら ひしゆん、通称マツキーを連れていた。

「今日も若菜姫との面会かい？」

「ええ、その帰りです。刃野刑事は？」

「何時ものコレだよコレ。しかも最近は肩どころか腰まで伸びてきてな、その相談に来たんだよ」

言つて、刃野は肩を大きく回し、続けて腰も左右に捻った。枝が綺麗にポキリと折れるような、耳に気持ちいい音が院内の廊下に響く。片や真倉の方はといえば、実に健康そうだった。

因みに、刃野の言う若菜姫とは、フィリップこと園崎来人そのさき らいとの実姉、園崎若菜そのさき わかなのことだ。彼女は加頭順の計画に巻き込まれ、彼が消滅したその日より風都警察病院に身を保護されていた。……重要参考人という名目で。

「にしても、また君一人か。相棒がこうして、傷付いた女性を心配して面会に来てるつてのに、あいつとききたら、もう1年以上も風都に戻ってこねえでさ。翔太郎の奴は一体何処で何してるんだか」
加えて「だからあいつは女にモテないんだよ」と、刃野は語末に付け足した。

続けて背後にいた真倉が、まるで猛犬の如く噛み付く勢いで便乗する。

「そうなんですよ!! 所詮、あの探偵野郎はそういう奴なんですつて刃野さんっ!」

「……そういうお前も、出世はするけど、モテはしねえタイプだよなあ」

刃野の呟きが耳に届かなかったか、真倉は感情を昂らせながら言葉を連ねた。

「現場に勝手に侵入するわ、人に心配を掛けるわ、まったく以つて迷惑な奴! なんちゃってハードボイルドの探偵もどき、左翔太郎オオツ! 一生風都に帰ってくんなああっ! アホオオツ!!!」

病院にも拘わらず、叫びに叫ぶ真倉。そのまま上司である刃野を置きざりにし、その場から乱暴に立ち去ってしまう。

情けない部下に呆れた刃野は、頭を掻き篦りつつ、深い溜め息をついた。

「悪かったなフィリップ君。気を悪くしたなら謝るよ」

「いえ、真倉刑事と翔太郎がアレなのは何時ものことです。気にしてませんよ」

刃野はまだ頭を掻き篦っている。

「ホント言うとな、口ではああ悪く言ってるが、実際あいつも寂しがってんだよ」

「真倉刑事はああ見えても、翔太郎と仲が良かったからですね。正に喧嘩する程、何とやらの典型的なタイプだった」

「まあな。翔太郎は、本当に風都中の連中から愛されていた。正に、あいつはこの町の顔つっても過言じゃなかった。……そんな奴が、

ホントに何やってんだかな」

フィリップは胸が痛かった。影を差した刃野の表情、真倉が発した言葉の真意。その全てが、まるで剣のように胸を斬り付け、心を刺し貫くのだ。悟られないよう、彼は帽子で目元を隠した。

刃野達、風都の住人は知らない、左翔太郎はもう存在しないということを。自分が、相棒である筈の自分が消してしまったのだ、翔太郎の存在を。……帽子に乗せた手にギョツと力が籠る。

その時、刃野のポケットの中で何かが騒いだ。携帯電話だ。どうやら呼び出しらしい、彼は直ぐに自分のポケットを弄り、震えるそれを取り出した。

「はい ああ照井警視。……解りました、真倉を連れて直ぐに」
相槌を打ちながら通話相手との会話を行う刃野。通話相手が照井竜であることから、内容はドーパントに関連することとフィリップは予測を立てる。

「では後程、失礼します」

刃野は照井との会話を手短に終わると、直ぐ様携帯のボタンを片手で操作。手慣れた手つきで、部下に送る文章を構成していく。……携帯を衣服の内側に仕舞うや、彼はすまなさそうに言葉を発した。「悪いなフィリップ君、急用だ。話はまた今度にしよう」

「仕方ないですよ。それより良いんですか？ 照井竜達が待ってますよ？」

「おお、そうだそうだ。それじゃあフィリップ君、また」

言うや刃野は、出口に向かって足を動かし始めた。比例してフィリップとの距離も徐々に広がっていく。

「……おっとそうだ。フィリップ君！」

「まだ何か？」

「もし翔太郎から何か連絡があったら伝えといてくれ。何時までも大切な相棒を放っておくなっとな！」

言伝を頼み終わると同時に、刃野の足は本格的に「駆け足」から「走る」に移行。内心を「プライベート」から「仕事」に切り替え

て前を向き、腕を大きく振り、上司と部下が待つ現場へと駆け出した。

廳で先程まで目の前にいた筈の知り合いの刑事は、院内廊下の角を曲がり、完全に姿を消してしまふ。再び一人となったフィリップは、もの寂しさから軽く息を吐き、こめかみを指で小さく搔いた。

そのまま自分の上着に手をつ込み、ある確信を持って黒い携帯電話型ツール、クワガタムシを模したスタッグフォンを取り出す。案の定、彼の掌の上でそれは振動を起こし、持ち主に通話を知らせた。

「まったく以って予想通り」。クスリと笑いつつ、フィリップは回線を繋ぎ、相手側が誰なのか、確信を持って呼器を耳に当てる。

「やあ照井竜、連絡を待っていたよ。……それで、場所は何処なんだい？」

警察病院を離れ、照井竜直々に応援の要請を受けたフィリップ。

翔太郎と共に愛用していた緑と黒のバイク、ハードボイルダーを駆り、風都を吹き抜ける風を身一杯に感じながら目的地を目指していた。

公道を駆け抜け、一般車を追い抜かし、それでも彼は一刻も早く辿り着こうととグリップを深く回す。

廳で、周囲の景色が変わり始める。先程までは綺麗な自然が溢れる緑。しかし、今やその緑も失せ、荒れ果てた茶色ばかりが目にする。……所謂裏通りいわゆる呼称される場所へと彼はやって来た。

「……此処だね」

ハードボイルダーを停車させ、降車するフィリップ。手始めに状況を把握しようと視界を広げる。同時に、アンモニアのような腐臭のような、鼻孔を突き刺す嫌な匂いに鼻全体を手で覆った。

見渡す限り、治安が良いとはとても考えられない。壁にはスプレ

ーによる汚れとも取れる落書き。生活も容姿も、心までも極限まで荒んでしまった浮浪者達が、恨めしそうにフィリップを睨んでいる。歩めど歩めど、それは変わらない。これが風都の一部なのか、と思わず疑ってしまいそうになる。風都の政治関係者はこのことを知っているのか、早く改善されることを願いたい。

人は完全に荒みきっている。蠅が舞う塵を枕代わりにして寝転び、毛布がない代わりに自分の持つありったけの衣服を着込んでいる。もしくは、物陰に身を潜め、寒さを少しでも凌ごうと両膝を抱えている者。生活に利用出来そうなものを手当たり次第に漁ろうとする者。誰しもが生きることに関心一杯だった。

そんな中1人の青年の背中がフィリップの目に止まる。

彼は残り少ないであろう自分の生活用具を他の浮浪者達に分け与えていた。それが何かまでは、青年の背中で視認することが出来なかったが、取り敢えずこの荒れ果てた裏路地にも、彼のような人情に厚い者がいるらしい。……ただ、青年の言動は何処か寂しそうだ。しかし、何時までも留まる訳にもいかず、仕方なく青年の背中を脛の裏に焼き付け、フィリップは照井から伝えられた現場へと足を進めていった……。

「フィリップくん、こっちこっち」

現場に辿り着いた彼を女性特有の甲高い声が呼び掛ける。亜樹子だ。

同時に上下を赤い衣服で整えた照井と共にいる彼女の姿を発見。

仲良さげに並ぶ2人を微笑ましく感じながら、フィリップは彼等の許へと駆け寄った。

「漸く来たか、待っていたぞ」

「まあ、こちらにも色々と事情があつてね。君を待たせたことは謝るよ」

言葉とは裏腹に全く悪びれる様子を見せないフィリップ。そんな彼の態度に苛立たしさを覚えたか、照井の表情が曇り、彼は頭を抱える。

珍しく感情を表出する彼に愉快感を覚えながら、フィリップは未だ苦い顔をする照井に言葉を投げ掛けた。

「……で？ 僕をこんな場所に呼び出したり、君程の人物がわざわざ僕を待っていたところを見ると、今回の事件は」

対し、照井は肯定の意で首を軽く縦に振る。間を空けず目の前に立つ探偵少年に向けて言葉を返した。

「その通りだ。……恐らく今度の相手、T3メモリが関与している」
照井の言葉に興味を覚えたフィリップは、口元に手を持っていき、薄ら笑いと共に「ほお」と呟いた……。

第3話 Fは1人ぼっち/相棒のいない街(後書き)

『ヒロイン帰還作戦 サブライダーの宿命』

少年にとって最大の憧れ それはヒーロー。彼等の夢の存在であり、永久に存在し続ける心の目標。

テレビという箱の中で悪と戦う正義の戦士は、彼等の心を掴み、虜にする。毎週繰り広げられる戦いに私達は心を躍らせ、僅か30分という短い番組が終われば、来週に向けて期待を寄せる。

だが、忘れてはいけない。ヒーローは1人で戦っている訳ではないことを。沢山の仲間に囲まれていることを 中でも忘れてはならないのがヒロインの存在である。

因みに現ヒロインは、宇宙オタクという愛すべき馬鹿の称号を得し城島ユウキ。(風城美羽、野座間友子の方が良いという声も多数)「……どおせそうですよ。皆、結局は新しい方が良いんですね」が、忘れてはいけない。個性溢れるヒロインの元祖と言える存在、その名は光夏海。彼女は今、非常に悩んでいた。

自分は所詮過去のヒロイン。今作には計3人のヒロインが登場しているが、思えば登場が遅れているだけ、自分が最も印象が薄い。笑いのツボだけでは到底太刀打ちが出来ない。

夏海は考えた。夜も寝ずに昼寝して、考えに考え抜いた そし
て思い付いた。

仮面ライダーのように自分の身体を「改造」すればいいのだと

「 という訳でこの私、光夏海は真のライダーヒロインとしてこの度新しく生まれ変わりました」

言って、長い黒髪の少女夏海が、腰に両手を当ててエヘンと胸を

張る。如何にも自身がありそうだ。

「どうしたらそういう結論になるの……」

「まあまあ鳴海さん。何だか自信があるみたいですし、聞いてあげましようよ」

頭を抱えるは、普段ボケ役に回る癖に珍しくツツコミ役に徹している亜樹子。隣では、「私聞いてない」と頭を抱える彼女を比奈が宥める。

刹那、夏海は素早く腰をその場に下ろし、悲劇のヒロイン宜しくスポットライトを独占。何処から取り出したのやら、白いハンカチを目尻に当て、ぐすぐすと涙を流しながら言葉を発した。

「思えば『仮面ライダーDCD』放送から約十数年、ヒロインの座を亜樹子さんに譲ってからというもの、私は後輩たちが活躍する度に、右親指の爪を噛む日々を送ってきました」

「いや、デイケイド放送からまだ3年も経ってないから」

「辛かったです、後ろ指を指される日々。『ナツミカンなんて古いよ、今はキターの時代だ』とか、『きつと何時かはまた夏海ちゃんにもブームが来るよ。……10年後くらいに』とか、『古い蜜柑なんて誰も欲しくない、お宝は常に先の未来にあるのさ』とかですが、もう絶えっ対に言わせません！」

「この人、あたしの話聞いてないっ!？」

しかし、次の瞬間には立ち直り、炎を背景に自身の決意を表明。

それは比奈を怯ませ、亜樹子を呆れさせた。

「私は改造され、ただ酸っぱい蜜柑は卒業。甘く美味しい蜜柑へと生まれ変わったのです。……あのライダーマンのように!」

「ら、ライダーマン、ですか？」

ライダーマン、それは結城丈二が変身する英雄の名称である。V3が日本防衛に就いていた時代、彼は当時の敵組織であるデストロンの科学者として、組織内でも名を馳せていた。その頭脳は将

来の幹部といつても過言ではない程。

しかし、それを快く思わない者が組織内にいた。当時の日本支部長、ヨロイ元帥である。

彼は組織上部に結城が裏切ったと誤った情報を伝達。結果、彼は組織より死刑の判決を受けるが、当時の部下達より命を取り留める。その際、執行に使用された硫酸により右腕を失ってしまった。

結城は彼等に失った右腕に変わる腕、「アタッチメント」を移植。以後は「復讐の鬼」と自ら名乗り、デストロンへの恩義を感じつつも、ヨロイ元帥率いる怪人達とV3をも交えて相まみえる。

その後、彼はV3の説得、更にデストロンの企む計画を前に、完全に組織から離脱。V3は彼に「仮面ライダー4号」の名を与え、以後はライダーマンとして後に続く組織と死闘を繰り広げていくことになる。

「私は彼のように改造手術を受け、手に入れたんです魔法の左腕を！！」

「あの、ライダーマンは右腕」

「お願い比奈ちゃん、言わないであげて」

「私の腕はパワーアップしたんです。その威力を見せてあげます！」
言うや、夏海はまた何処からか固そうなコンクリートの塊を取り出し、それを左手で覆うように掴む。

刹那、彼女が手に力を込めると、塊は音を立てて碎ける。握り締められた彼女の拳の中から、粒がまだらな石がぼろぼろと零れ落ちた。

それを見た亜樹子は素直に「おおっ」と感動の声を上げる。片や、比奈は何やらつまらなさそうだ。

頬を小さく膨らませていた彼女に気付かず、夏海は満面の笑顔で2人に話しかけた。

「見ました！？これが生まれ変わった私の力です。これならどん

な怪人だつて軽く一捻りですよ」

「凄い、夏海さんがこんな風になっちゃうなんて……私聞いてない。ね、凄いよね比奈ちゃん」

背後振り向いた亜樹子は、一瞬にして言葉を失った。

何とそこには、夏海の破壊した塊より遙かに大きい岩塊を前に、構えるヒナの姿が。勿論、その岩どっから持ってきたんだなどと聞くのは野暮である。

「はあああああ ふんにゆううつっ！」

「叫び声カツコ悪うつ!？」

比奈の繰り出した拳の一撃が、眼前の岩を粉々に砕く。人かと疑いたくなる光景を前に、亜樹子、そして夏海は呆然と立ち尽くした。岩を砕き終え、両手に付着した砂を払う比奈。踵を返すや、彼女は2人の先輩ヒロインに向けて、邪悪な黒い笑みと共に言葉を投げた

「怪力で私に勝つなんて、ざっと800年早いですよ夏海さん」

「うわああああああん！ 比奈ちゃんの馬鹿ああああああっ！」

次の瞬間、敗北を喫した元ヒロイン、略して元ヒロは大粒の涙を溢れさせ、おまけ特設スタジオから逃げ出してしまふ。彼女の悔しそうな泣き声は、暫くの間当スタジオで山びこのように響き続けた。それを亜樹子は引き攣らせ顔で、比奈は勝ち誇った顔で見送る。

「所詮はサブヒロイン、略してサブヒロは本当の真ヒロインの私には勝てないんですよ。……ライダーマンのように、ね」

「比奈ちゃんって、結構腹黒いんだね。あたしこんなホントに聞いてないよ」

もしかして、ヒロインの立ち位置として一番危ないのは自分なん

「じゃないか。そう静かに内心で危ぶむ亜樹子であった。
「てか、ヒロインに怪力って別に要らないんじゃない？」」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2406y/>

オース&ダブル&ディケイド Riders RETURN! RETURN! RETURN!

2011年11月20日18時58分発行